

ホームページ

図書館に思うこと

収書・整理課 泉野睦美

大学図書館はコンピュータの導入によりおよそこの20年の間に図書館の業務の合理化、効率化と利用者へのサービスの向上が飛躍的に進みました。さらにこの10年の間にはインターネットの普及により、データベースや電子ジャーナルのような電子資料が大学図書館の学術情報資料として不可欠なものとなりました。

今では利用者は図書館のホームページで公開されているOPACからいつでも自分が探す本や雑誌などの資料を検索することができるようになっていますが、私が近畿大学中央図書館で働き始めた頃はまだカード目録で資料を検索する時代でした。洋書の整理を担当していた私は毎日、英語やドイツ語の辞書を片手に本のタイトルや内容から目録、分類をとり、その本の情報を規定の大きさの1枚のカードにタイプライターで打ち込み、必要な枚数を専用のコピー機で複写した後、著者名カード、書名カード、分類カードというふうに分けて、閲覧室のカードボックスに決められた順番に従って組み込むという作業をしていました。今と比べると本当に多くの時間と労力を使っていました。利用者は著者の名前や書名などから該当するカードを見つけて、そこに書かれている分類番号から自分が求める本がどこにあるかを知るのが普通の光景でした。

平成4年に図書館の電算化が開始され、図書・雑誌の書誌情報がOPACで検索できるようになりました。平成15年には新システムに移行し、OPACでの個人利用状況でのさまざまな手続きがインターネットを通じて自宅のパソコンからでも可能になり、利用者にとっ

て図書館がより身近になりました。またこの4月から図書館のホームページも全面的にリニューアルされ、図書館の利用案内に加え、学術資料の取得に役立つ情報サイトも豊富にリンクされ、充実したものになっています。図書館では学生がレポートや論文を作成したり、学習のために資料を探す時、中央図書館の膨大な資料のなかから信頼性の高い情報を効率的に検索する方法を知ってもらうために定期的に講習会を開催していますが、受講者がどのくらい理解できたか、改善すべきところはないかなどよく検討して、より一層学習支援に役立つ講習会を作っていかなければと思います。また学生生活にとって図書館は必要なものと一人でも多くの学生に感じてもらえるようにしていかなければと思います。

また、図書館は学生選書の会や蔵書展などを企画、開催しています。試験や学習の目的のほかにも、もっと自由に気軽に図書館を利用してもらいたいというのが図書館員みんなの願いです。私は目当ての本もなく、ぶらぶらと書棚を見て歩くのが好きですが、装丁のきれいな本や、タイトルが気になり思わず手にとって読んでみると、いろいろと面白い本に出会うことができます。先日ともうそうして借りて読んでいて「あっ・・・」と気づいたことがありました。それは本の印刷が、ちょうど今秋の蔵書展のテーマとして取り上げた『美しい本の世界：ウィリアム・モリスとプライベート・プレス』で19世紀にイギリス人のモリスが理想の書物として追求した本の印刷の余白のとり方に良く似ていたからです。1冊の本を読むことで新しい発見ができたりと読書は世界をひろげてくれます。一見学習とは関係のないと思えるものでも、あとになってそれが役にたったりします。とにかく、図書館にきてまず1冊手にとってみてください。勿論、図書館には図書以外にも雑誌やAV資料などの資料が豊富にあります。そして、図

書館で気づいた事やこんなことができたらいいなとかどんな些細なことでもどんどん図書館に提案してみてください。一人一人が参加しているという意識があればきっとよい図書館ができると思います。

ある本に「図書館のある国は平和な国である」と書かれていました。私たち図書館員は学生や図書館を利用するすべての人が図書館を活用できるようにお手伝いをし、この言葉に共感してもらえるように努力していかなければと思っています。

「魅力ある図書館」

収書・整理課 出田 善明

情報ネットワークが発達し、利用者が意識せずにその情報ネットワークを利用するといういわゆるユビキタス社会が実現しつつあるように社会が変化している今、大学図書館もまたそのあり方を問われています。これまでは主に紙でできた本の所蔵を目的としたものでした。しかし電子ジャーナルやデータベースに見られるように本の形態が変わってきています。利用者の図書館離れや本離れが言われていることもあり最近ではサービスやそれら資料が持つ情報をどのようにして提供していくかということに重点が置かれています。

しかし環境がいくら変化しようと、利用者自らの意思で図書館を利用して知識を増やしたいと思えるようなサービスを提供することが大切だと思います。

利用者自らの意思で図書館を利用してもらうためには、まず利用者の要望を知る必要があります。図書館では基礎ゼミ対象図書ガイダンス、学生選書の会、データベース体験講座など様々なイベントを催しています。さらに本の種類、蔵書検索端末の数や位置、書架のレイアウト、職員の対応や図書館の規則など、利用者が直接関わる要素がたくさんありますが、

すべて具体的な意見を集めることが大切です。そうすることで利用者の要望が明確になり、実現のための改善点などがはっきりとします。

現在、要望を集める手段として定期的にアンケートが実施されています。先に記述したことを実現させるためにはアンケートの内容を今よりもっと具体的なものに変える必要があると思います。またアンケートの配布場所も意見をいただきたい方が集まる場所など範囲を考慮することでより様々な意見をいただくことができると思います。そして、現在はそのアンケートを集計して担当職員で回覧、意見交換がされていますが、残念なことになかなか意見がまとまっていないように思います。よって迅速に良い意見をまとめ、利用者フィードバックするためにはある程度人数を絞ったり、もしくは担当外職員を招いたりするなどして分析を行う専門のチームを作る必要があると思います。

しかし、これらの方法は現在の本学図書館の魅力を高めるものです。10年、20年、その先も考えないといけません。利用者の利用意欲を掻き立てる方法はそれぞれの時代で異なってきますが、本の持つ情報はこれからも変わりません。さらに良い本と呼ばれるものは10年、20年経っても評価され必ず需要があります。つまり10年、20年、長く魅力を保つ方法の一つとしてそれら良い本を所蔵することが考えられます。これを実現させるためにはその本をよく知る人物に意見をいただくことが一番だと思います。教員、学生、事務員、一般企業の会社員や公務員、つまり大学内だけでなくもっと広い範囲、分野の方々に意見をいただくことで本当に良い本を選ぶことができると思います。

常に環境は変化し、その時その時代に必要とされるものは異なります。しかしその本質はいつの時代も変わらないと思います。利用者のためを思い、利用者が成長するそのお手伝いをすることが図書館員の役割だと考えます。